

法圓寺における

不可思議なる氷像出現とその考察



目次

一、聖なる氷像出現	1 回目	P 1
二、聖なる氷像出現	2 回目	P 4
三、聖なる氷像出現	3 回目	P 6
四、聖なる秘蹟と『エノクの鍵』		P 8
五、聖なる氷像出現	4 回目	P 10
六、聖なる教示「紅玻璃色秘法」		P 20
七、アルナチャラ山と萬歳樂山		P 28
八、聖なる氷像出現	5 回目	P 32
九、聖なる氷像出現	6 回目	P 34
聖なる氷像出現	7 回目	P 34
十、ダークエネルギー・ダークマター		
物質化現象		P 37
十一、見える世界・見えざる世界		P 44

十二、再び問う、氷像の三角四面体		P 50
十三、三角四面体マカバ三角火輪		P 54
十四、光り輝くものへの祈り		P 58
十五、思索の根幹		P 59
十六、聖なる氷像出現	8 回目	P 61
十七、聖なる氷像出現	9 回目	P 63
十八、恩師が語ったこと		P 66
十九、ハータツクの『エノクの鍵』		P 73
二十、聖なる氷像出現	10 回目	P 77
二十一、明け方に明星と五股金剛杵が		P 79
二十二、不可知の雲		P 84
二十三、イザヤ書第6章		P 89
二十四、混迷の時代に啓示される		P 94
二十五、結語		P 96

一、聖なる氷像出現！ 第1回目

平成二十年二月九日(土)新月の早朝法
圓寺の手水石鉢に不可思議な氷像が出
現する。

手水鉢に氷像が出現していることに
初めて気づいたのは、平成二十年二月
九日(土)新月の早朝であった。

以来、注意して観察してきたが、令
和に至る今日まで、法圓寺の手水鉢に、
度々、不思議な造形の氷像が湧出して
いる。不思議なことに、こうした氷像
が地球上における大変動と関連してい

るように思われてならないのである。



この日の朝は、かなり冷え込んで
いたものの、周辺に、つららなどは全

く無く、石の手水鉢も境内の庭先に無造作に置いてあり、単に雨水が溜まっている状態であつた。しかも、近くで水が滴り落ちた様子も全くない。手水鉢の溜まり水が単に凍っているだけのものであつた。

その凍てついたツクバイの小さな氷の湖面にすつくと、まるで観世音菩薩のような像が立っている。頭巾や法衣を着用しているふうであつた。しかも、顔の目鼻口まである。まさに、驚きというしかない。



あまりのリアルな氷像に、はじめは、誰かのいたずらかと思った。

それにしても、自然にできたものとなると、なおさら考えられず、まさに、

不可思議！不可思議！という他はない。

二月九日に氷の観世音菩薩が湧出して以来、奇瑞であれば畏れ多いことであるが、しかし、本当のところはどうなのか、ずっと観察していた。しかし、その後全く、そういった氷像は出現せず、やはり誰かのいたずらであったかと思っていた。

だが、二月二十二日、早朝、手水鉢に氷像が形作られていた。しかも、今度は、観察中、徐々に、氷像が水中から上に伸びていくのを、まのあたり

にしたのである。



二、聖なる氷像出現！ 第2回目

平成二十年二月二十二日(金)満月の
早朝、今度は、手水鉢に インドの
「アルナーチャラ山」と「シバ神の
像」とおぼしき氷像が出現。



聖なる山 アルナーチャラ



境内に 顕れたアルナーチャラ



やると、なんと！三
角の「氷の山」が出
現している。

この氷の山の姿に、
釘付けとなった。と
いうのも、どこかで

そう！これは、もう、いたずらでも
何でもなく、自然現象として明らかに
手水石鉢の湖面から氷の柱が湧出して
きたのである。しかも、今度は、白龍
か、シバ神の神像のようなものが伸び
出した。その指し示す先の対面に目を

見たような山の姿をしていたからである。書齋に戻って写真を探すと、驚いたことに、それは、まるであの聖なる山と同じ姿であった。まさに、インドの聖者ラーマナ・マハルシが生涯こよなく敬愛し、崇めつつ、住んでいた、聖なる山「アルナーチャラの丘」そのものに見える。しばし、呆然とし、心がうち震えざるをえなかった。

ラーマナ・マハルシは、不生の仏心を指し示した二十世紀最高の正覚者とされた聖者である。彼は、十七才で、

死との葛藤を超え、精神の至高の座に再生し、不滅の意識を悟得した。以来、生涯ずっと解脱の境地にとどまり、正法を示し続けた人である。この希有なる覚者シュリ・ラマナ・マハルシは、聖なる山アルナーチャラに瞑坐し、一歩も出ることなく、沈黙の靈明なる光輝を全世界に発し続ける。その教えは、平易にして、直裁。覚者中の覚者として、世界中に多大なる影響を与え、昭和二十五年に涅槃に入ったとされる。彼の「不滅の意識」は日本の禅僧盤珪

が示した「不生の仏心」に通ずるものである。興味深いことに、これらは、新月の明け方、満月の明け方に起きている。（小生はこの聖者については書籍を手にしているくらいで深くは知らない。）

アルナチャラの丘の上を　小さな鹿や
熊や豚たちが歩きまわる　大きな像
も歩きまわるが　全ては平和である
ここに主アルナチャラがアンナマラ
イの御名によって

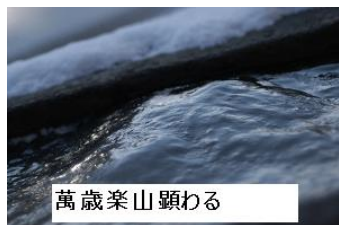
浄められた　至高の知識として在り

やってくるものたちの　無知をぬぐい
去る

主の恵みに漏れるものは誰もいない

三、聖なる氷像出現！　第3回目

平成二十年二月二十八日の下弦月
早朝、今度は、なんと！この手水鉢
のに、氷の「萬歳楽山・半田山」を思
わせる山並みが出現する。



この年に、法圓寺の手水鉢に繰り返
し湧出する氷像を見て、これは「不滅
の意識（不生の仏心）の中で通じ、生
起してい」ることを如実に示している
のかもしれないと思った。

この三身一体の氷像は慈悲と愛と叡智
の側面をあらわしているのではないか。
即ち、これまで小生に秘授されてきた

① アガシャ・モーゼ・ブツダ

② ブツダ・メタトロン・アミリタ

③ 如来の三身（法身・報身・応身）

④ 紅玻璃色無量壽・觀世音菩薩・辯才
天女。

⑤ ブラフマン・シバ・ビシユヌ



四、聖なる秘蹟と『エノクの鍵』



氷像化出現して二年が過ぎた或る日。
平成二十二年十二月上旬のことだった。
散歩中、「救済のための手はずは整え
ている。これから遭う者に、ひたすら
不動明慈救呪を常念すべきことを知ら

しめよ。」という突然の内示が起きた
ような気がして、その真意を推し測り
かねていた。その数日後、偶然に、東
京池袋の書店で、「ハーstattツクの
『エノクの鍵』を手にした。

その前書きを一瞥して、思わず息を
のんでしまった。実は、その内容は、
昭和五十一年五月、恩師の高橋信次が、
その時、偶々、彼の側にひとり居合わ
せた小生に向かって話してくれたふじ
ように不可思議な内容と酷似していた
からである。高橋は、この直後、六月

に他界しているの、おそらくこの話をまのあたりにしたものはかなり少ないと思われるし、小生もあまりにも奇異である高橋の話を他言することはなかった。高橋は病身をおしてギリギリのところまで語っていたので、その内容は、不可思議なる大天使の評議会の様子であったが、『エノクの鍵』の内容がきわめて酷似しており、まさか！と仰天してしまったのである。ハーッタツクの『エノクの鍵』に触れるまでは、正直、高橋の語る内容について、小

生にその真偽を測る何ものも持ち合わせておらず、また、にわかには理解しがたく、小生としてはなすすべもなかった。高橋とハーッタツカ両者の内容は見えざる世界とはいえあまりにも相似している秘義が開示されていたのである。このような摩訶不思議なる秘義が、このようにして書籍として世の中に開示されるということは、何か、現代が、のっぴきならない事態に陥っているのではないかという緊張が走った。



五、聖なる氷像出現！ 第4回目

平成二十三年三月八日！あの「ツクバイ」に、再び、「氷の聖体」が出現。

法圓寺の手水鉢に氷像が出るのは、平成二十年二月以来のことと、突然であつた。なんとも不思議な形の二つ氷像とそのすぐ側に翼のような氷状が顕れている。しかし、これが、この直後、平成二十三年三月十一日に起きた東日本大震災の甚大な災害や原発事故に見舞われている。今思えば、この氷像は大震災をを暗示していたのかもしれない

い。

氷の海に浮かぶ聖なる幕屋と「不死鳥」の氷像は、津波による原発事故を暗示し、大天使がギリギリところで守護していることを示していたのだろうか。

おそらく、翼は大天使メタトロンを示し、二つの玉座は大天使メタトロンとエノクを表象するものであったのかも知れない。とはいえ、この氷像を目撃した時点では、その見えざる意志を推し測りかねていた。



前述するように、「超古代の秘儀」を解き明かしている『ハータツクの『エノクの鍵』は奇しくも、恩師高橋信次が死の直前、ひとりその場にいた

小生に対し語っていた「太陽系霊団の系譜と今ここにおける人類の課題について」エルランテイの密儀参入している状況とと驚くほど一致している。

不可思議なる氷像出現が身近で度々起きてくる。その真意は一体何であるのか！

二つの玉座と不死鳥は大天使メタトロンとエノクさらに阿字本不生を示されたブツダが深く関連していると考えらるならば、いよいよ我々は尋常ならざる事態に遭遇し、否応なしに霊的大変

革を遂げねばならないことは逼迫しているのかもしれないと考えていた。

その矢先！！。

平成二十三年三月十一

日。マグニチュード9・0という巨大

地震が関東・東北太平洋沖で発生、未

曾有の大惨事となった。更に、これに伴う原発の事故は最悪のメルトダウンと水素爆発を起こし、放射能汚染の重い課題を福島そのもの、日本国土そのもの、地球上世界そのものが背負うという、大打撃を被っている。余震が続く中、巨大地震と放射能汚染の恐怖に

世界は震撼することとなった。



しかし、小生は「ブツダ親説」を根幹に据えていたので、見えざる世界に
関しては幻影と妄想と自己欺瞞に陥り

かねないと用心していた。

その上で、なお、こうした不可思議なる現象がなぜ生じているのか。推し測りかねるものが多かった。

ゴードマシッダールタ・釈迦牟尼仏、
ナガールジュナ、シャーンタラクシタ、
遍照金剛弘法大師空海、僧盤珪禪師、
アルナーチャラ仙ラマナマハルシ、世
界教師「クリシュナムルティ、チベッ
ト学の最高峰・山口瑞鳳等が指し示し
た「阿字本不生」と、こうした氷像現
象は無関係であるのか。見えざる世界

からの導きによるものであるのか。

その後、次第に明瞭になる「光り輝くもの」の金胎两部不二曼荼羅。ブツダやナガルジュナ、クリシュナムルティが示される阿字本不生。恩師高橋の『人類の意識の変容』。同世代のケン・ウィルバーの『万物の理論・ひかりあるものの創発性』。

法圓寺の境内に度々出現する「氷像」は、「先験なる本不生の源流、今に新たなり」を示すものであったのである。



平成二十三年七月。全く知らないあなたの方から突然、メールが入る。「インドのアシュラムの聖者たちによって、既にシバ神が日本の福島の萬歳楽山と法圓寺で救済に入っていることが告げられ、インド全土にある聖なる大寺院において、日本復興のための大規模なプージャとホーム（護摩）が長期間に

わたり捧げ続けられている。」との知らせが飛び込んできた。

そのメールは以下のとおりである。

後にも先にもこれ一回限りのものではあったが、見えざる世界の繋がりを知らせる重要な貴重な内容なので、記録の一端を紹介しておく。

「Om Sri Sai Ramと最初に書くことをお許しください。

ほんの一週間ほど前にたまたまこちらのお寺と山のことをネットで見て知ったものです。

失礼ながらその時初めてこちらのお寺と山の存在を知りました。

小生はインド占星術の鑑定代行をインドでしているのですが、今年に入つて占星術師が世界が難しい時期に入るといふことで、その対策で、密教でいうところの星供養にあたるのでしよう。その、星の影響を和らげるプージャを、希望者のお名前を加えつつ、南インドはクムバコーナムの惑星の各お寺（この地域には独立した各惑星のお寺があります）でホーナム（護摩供ですか）

とアビシエーカム（水や牛乳などを神像にかける礼拝）をしながら五日間でまわりました。

この大規模プージャは予想される特に困難な時期に行えるように占星術師の指示で今年の一月か二月から計画していたのですが、プージャ開始の三月二十四日に先駆けて十一日に震災が起ったものですから、これは大変なことになったものだと思います。回ったものでした。

その後、日本の今後の見通しを把握す

る助けとなるように、日本国それ自体の占星術鑑定をしたり、日本のアガスティアの葉を取得したりしました。

そのアガスティアの葉で示された、日本のカルマを解消するための処方箋のうちのひとつを、先日、有志の賛同者の方々の資金援助の元にアルナーチャラで十二日間かけて行なってきたところです。この十二日間間に十三回のホームカムと、数多くのアビシエーカム、また、人々への食事や衣類の布施などが行なわれました。（この規模の

プー ज्याを後二回、することが処方箋として指示されています。現在、日本のカルマ解消のためのプー ज्याの第二弾を八月末に別の場所で準備中です）そのプー ज्याが終わって小生たちの本拠地であるプッタパルティに戻ってきたのが七月一日で、そのすぐあとにこちらのお寺と山のことを知ったのです。そのアルナーチャラでの日本のカルマ解消のためのプー ज्याなのですが、計画段階で、向こうのお坊さんたちや識者やスワミと呼ばれる方たちが、ど

うやったら日本をこれ以上の災害から守ることが出来るだろうか？と話し合っ
て、今回の十二日間のプー ज्याすべ
てにおいてクリスタルのシヴァリンガ
ムにも各お寺でプー ज्याをして、それ
を日本に持って行って、日本でそのリ
ンガムを礼拝することでより確実に日
本が悪影響から免れるんじゃないかと
いう話になり、全てのプー ज्याのとき
に四つのシヴァリンガムもプー ज्याし
てもらいました。

そのうちのひとつは占星術師自身が

南インドのプッタパルティで礼拝し、ひとつはすでに兵庫の小生の実家に持ち込まれて礼拝されています。もうひとつは縁のあった富士山のふもとのお寺に持ち込まれる予定で、すでに日本にわたりました。

そんな折にこちらのサイトを拝見し、あとひとつのシヴァリングムをこちらのお寺で祀っていただくことは非常に適切なのではないかと思ったわけです。しかし、実際、どうなんだろう？と思っ、念のため、透視の知人に見て

もらったりもしたのですが、彼の見解ではシヴァ神がこちらの山で日本の災害を抑えようとしているとのことでした。占星術師も、災害を抑えるにはシヴァに祈ることがとても重要だということ解です。アガスティアの葉で示された、プージャの候補地三箇所のお寺はどれもシヴァのお寺でした。（そのうちのひとつがアルナーチャラ自身を本尊とするアルナーチャレーシュワラテンプルでした）

また、日本のカルマとしては大昔に日

本が地球に対して行なった破壊行為があるそうで、そのため、マザーアースの怒りを償うための女神へのプージャも重要なカルマ解消の内容として示されていました。

本来もっと正式にご連絡差し上げべきところでしょうけれど、連絡先を探しているうちにこちらの掲示板を発見しましたのでこちらに書きこまさせていただきますました。

小生どものインド占星術サイトに、先日行なわれた日本のカルマ解消のた

めのプージャの記録も載せてありますので、見ていただけるとありがたいと思います。



六、聖なる教示「紅玻璃色秘法」直伝



◎光り輝く遍照金剛をまのあたりにし
空海秘伝『紅玻璃色無量壽佛秘法』を
授かる。(いまここに心被授)

●平成二十三年八月二十九日

この日、歡喜寺の総代長に請われて
初めて寺におもむき、初めて本堂に入
る。歡喜寺の裏堂に祀られている約三
百年ほど前の阿弥陀仏

「**大光山正徳寺本尊阿彌陀大佛**」に邂
逅する。不思議にも、この仏像の御眼
から頬に涙が流れているではないか。
怪訝に思い、この本尊の御前でしばし

佇んでいると、どこからともなく声なき声が聞こえる。

「われは、幾重にも悲しみ苦しんでいるこの世・あの世の人々を救済すべく誓願されている。どうか、人々の目に触れやすいところ置いておくれ。」

（どこに）と問うと、「本堂入って左奥に西を背にしたところだ。」と。確かに、そのように仰せになられた。ちようど、この寺の檀徒総代が集まってきたので、総代たちに相談し、もともと祀られていた場所だということ、

この本尊をご移動申し上げることにした。

その移動中、大佛の体内に、次のような墨書きがあるのを発見する。尋ねると、これまで誰も気づかなかったという。その墨書きは左記の通りであった。

● 享保六辛丑歳八月吉祥日

大安寺十世

木蓮社良覚上人弟子

大光山 正徳寺住職四世

想蓮社良環團秀代

施主化主 桑折町在住角田三左衛門

●文政十二巳丑歳二月吉祥日

宥政本尊持久

湯野不動寺大阿闍梨法印宥精佛子

歡喜寺五世法印宥政

(注…この不動寺宥精大和上も歡喜寺
宥政大和上も、晩年、法圓寺の住職と
なった。)

これは、誠に不可思議な佛縁である。
実は、さまざまな佛縁や法縁を通じ、

生を頂戴して以来この方、見えざる世界から、絶えず示されていることがあった。それは『自己変革』である。だが、今日に至りてもなお愚劣極まりなく、年齢を重ねる毎に汚染にまみれている。悔い恥じてもお、平然と自我の詭弁を弄するばかりである。このような記録をしたためることすら、自我蒙昧の虚妄の証であろうと思っている。それゆえ、これまで突き動かされる見えざるものの力の前では、いつでも妄見は棄てる覚悟である。そのような気

持ちで過ごしていると、これまであまり触れる機会のなかった『全託なる不生心』ということが即座に示される機会があった。「全託」は「絶対帰依」

であるから、宗教的には一神教や弥陀信仰に見られる、「救い給う神や弥陀のほかになし。ひたすら自我は捨て、去り、御心のままに、念仏申しあげるのほかはない」という。だが、人類史上、こうした信仰を標榜する者達が、今日でもなお、傲慢非道な戦争を繰り返している。これが、現実である。で

あるから「全託」とは、このような蒙昧な信仰によつては至り得ないことは自明の理である。

自我の悪業を自覚するものでない限り絶対帰依はない。そのような意味で、



平成二十二年末に内示が降りたと思われるあの真言の常住念仏、

すなわち、「いつでもどこでも不生の佛心でいること」を『全託なる不生心』をこころざしていたことは確かだ

ある。おそらく「こうした見えざる世界からのほからいであろう、この阿弥陀大佛は対面すると、いつでも、どこでも、誰にでもわかるように応じられる不思議な大仏との邂逅であった。

困難な時代はまだ始まったばかりである。これから、それこそプルトニウムの半減期に匹敵するほどの期間、核戦争の脅威も含め人類はさらなる困難に直面するであろうそれらの計り知れない困難と危機を乗り越えるには、僧盤珪禪師の（不生の仏心ただひとつ）

であること、（光り輝けるものへの絶対帰依すなわち全託）することにほかならない。この阿弥陀大佛はそれを大転法輪すべく、この世に出現、正法をお解きになり自覚をうながしておられると自らお示しになられたのである。



奇しくも東日本大震災による半田山
のがけ崩れ跡は法圓寺から見ると「剣
を持つ不動明王」に見え、歡喜寺から
みると「弥陀如来・觀世音菩薩」がお
立ちになって、まるで被災地を擁護さ
れんとしておられるかのようである。

以上の経緯から推し測るに「半田山
・萬歳樂山・山頂にアルナチャラ本初
不生淨土曼荼羅が顕現」し、あの世こ
の世を通して、世界にとって由々しき
大問題を起こしてきた人類の文明に対
する大浄化のプロセスが始動している

ことを知らねばないということなので
あろう。しかも大事なことは大浄化の
プロセスであるから、根本的な人類の
文明の有り様を問うものであり、如来
界からの慈悲救済の力を頂戴しなけれ
ば、人間の条件付けられた精神では、
この危機はとうてい乗り越えられない
ということであろう。



平成二十三年三月八日以降の「氷像」出現においては、見えざる世界から、「人類の破滅から救済すべき究極の大使メタトロンとエノクとブツ

ダ」を顕し、しかも「不死鳥」の如き

「新生創造」の神泉である本初不生が「光り輝くもの」である太陽系霊団の統帥大使メタトロンの翼がはつきりと出現している。これは特定の宗教による教義だけでは説明しきれないものであると思われる。超宗教現象である。新生創造のエネルギーを象徴する

不死鳥は「本不生」を意味し、今や、小生達一人一人がこの偉大な力が働いている事実を理解しなければならぬ時期に入っているであろう。



令和に入った現在もなお見えざる世界から次第に明かされてきていることがある。それは、インドの「アルナーチャラ山」、ジャワの「ボロブドール寺院史跡」、霊峰「萬歳樂山」が「光り輝くもの（毘盧遮那佛）」が普賢金剛薩埵として、いまここに顕現し、人類の意識の変容をうながし続けられておられるということである。

氷像の奇蹟は、必ず、ブツダの言う、刻々の本不生を以て新生創発する本来の姿に帰するべく、「光り輝くもので

ある遍照金剛」が降り立ち導いているというのであろう。

法圓寺本尊大日如来

歡喜寺本尊阿弥陀如来

正徳寺本尊阿弥陀如来

を光り輝くものの立体曼荼羅にほかない。



七、アルナチャラ山と萬歳樂山

前述したように、平成二十年二月二十八日早朝に法圓寺境内の一連の氷による奇瑞によって、靈峰萬歳樂山は靈峰アルナーチャラ山と繋がっていることが啓示されている。

靈峰アルナーチャラ山は南インド、タミル・ナドゥ州にある山の名称。ヒンドゥー教の神であるシヴァ（破壊と創造の神）そのものといわれ、昔から聖地として巡礼の対象となっている。チェンナイ（マドラス）から南西約2

00KMのところにある町、ティルヴァンナーマライにある。靈峰アルナーチャラ山はインドのシバ神の本体とされ、二十世紀最高の覚者の一人ラマナ・マハルシがビシュヌ神とともに、法眼圓明なる不生の仏心（真我）の光輝を放ち続けている山である。

アルナチャラは仏教のアシャラノダすなわち不動明王のことを云い、靈峰アルナチャラ山は地球に降臨したもうアシャラノダの寶盤山（大盤石）である。

靈峰萬歲樂山はこの靈峰アルナーチヤラ山と靈的に関連していることを法圓寺に出現した氷像が物語っている。

氷像はインドのナーガという神体すなわち蛇神（これは龍神でもあり、かつ、シバ神でもある聖体）を形状かして示されたと考える。そもそも、龍（ナーガ）は天地を貫くエネルギーを示すもので、小生が、萬歲樂山に入山するに際し、最初に出現し、導いてきたものでもある。

それは、萬歲樂山周辺に残る伝説上

でも大白蛇、九頭龍・そして八大竜王の難陀竜王（春日大明神）が密かに伝えられてきていたようである。

龍王が現在もこの山を擁護していることを直接伝えられたと思っている。

さらに、驚くべきことは、法圓寺に顕れた氷像によって、龍神の本体がインドのシバ神とも通じているということであった。（この証明は前述で既に述べてある。）

太古の伝説という話の中には、天孫降臨の龍族とオリオン座の方向β星か

らやってきた種族が、地球上でので墮天使ルシフェルと大天使ミカエルのハルマゲドンに比される圧縮系（局所性）開放系（遍在性と相剋が龍とシバの対立として描かれ伝わっているという話もある。

法圓寺に聖体出現している氷像の龍は、萬歳樂山が惑星地球の太古からのエネルギーの本質にかかわっていることを示すものであると考える。

龍の持つ本質は上記のシバ神の破壊と創造のエネルギーを示すが、そのほ

かにそのエネルギーの本質である遍在性を示している。この遍在性の本質は、奇しくも、ブツダ釈尊の親説や南インドのナガールジュナ（真言宗の第八祖である龍樹菩薩）が示した「空・阿字本不生」をあらわすものであると考えている。

数年の準備期間を余儀なくされて、ようやく初めて萬歳樂山頂に至ることができた日は、登山の不可を問うべくルディアのルーンの石に五回問うて、五回とも全く同じ応答があり、それが、

萬歳樂山の指し示すものであらうと判断し、山頂にむかい、そこで実際に天空に顕れたものがなんとルーンの石が示したものであったことに思わず心が震えた記憶がある。

すなわち、「月」と「鷹」と「自由なる意識」であったのだ。

月は「本初不生即ち光り輝くもの」を指し、天かける鷹は如来の境地にたつこと、自由なる意識は自己変革をおこし不生の仏心に目覚めることであつた。

よってわれわれは「不生禪」を實踐することをおいて他にないことである。インドのゴードマシッタールダ釈迦牟尼佛、ナガールジュナ、弘法大師、僧盤珪、ラーマナマハリシ、クリシュナムルテイ等が示す「不生禪」が重要であるということなのであらう。

八、聖なる氷像出現！ 第5回目

平成二十五年二月二十日

永代供養墓の慶の墓前に出現



平成二十五年二月十九日夕方、歓喜寺の本堂に祀られている正徳寺阿弥陀如来の御前にて、ふと、他界した妹の気配を感じることが多いので、「何か伝えたいことがあるのであろうか？あるのであれば小生ばかりではなく、誰にでもわかるような形でお示し願える

でしようか」と、ひとには言えないような思いにかられて、しばらく黙想していたのであるが、なんと、その翌朝のことであつた。妹の墓前で氷像が顕れていたのである。しかも、不死鳥のような姿に見えるものであつた。妹は生前不死鳥を絵に描いていた。その鳥は、ある上空を指しているように見え、コンパスと地球儀で推測してみると、仙台からアラスカ方面を指さしているように思われた。数日して、ニュースでアラスカ上空からものすごい光を発

してロシア方面に落ちていく隕石の様子が映し出され、学校の窓ガラスが割れるほどの爆音であつた。科学者の解説ではアラスカの上空から侵入して、角度がもう少し違ってたら地球は大惨事になるところだったと伝えていた。



九、聖なる氷像出現！ 第6回目

平成二十九年二月二十五日



聖なる氷像出現！ 第7回目

平成二十九年三月十一日



このときの冬は本堂の屋根から落ちてくる雪も多く、かなり残っていたのだが、一気に溶けだし、埋もれていたものが久しぶりに顔を出してくる。

朝明けの本堂の中にも、漸う漸うと、陽光が射し込み、凜と輝き、堂内にぬくもりが漂う。経の鐘に呼応するかのようにさえずる小鳥の声にも、待ちわびた春の喜びを感じる。

境内の岩室大師をお参りし、ふと、その傍らの手水鉢に目を向ける。

というのは、昨晚、祈りを捧げる中、本尊を前にして、ふと、物質界と如来界という世界を想定すれば、それは、ブツダが指摘されるように、虚妄なるものであるのだろうか。だが、それはそうだとしても、こうして物質界がわが目に映るように、如来界を含む物質的次元を超えた世界もまた、それらを映じさせる何かがあるのではないか？という思いを拭えないでいた。

確かに、心や意識、無意識の世界、インド古来からの信仰であるアートマ

ンやブラフマン、あるいは古代エジプトのアーメンやアミー。ギリシャ神話のゼウスやアポロン。プラトンのイデアやロゴス。ペルシャのミトラ神やザラトゥストラ。あるいはユダヤやキリストなどの絶対神や三位一体の神、大天使から精霊など洋の東西を問わず広がる信仰は、いかにそれが広大無辺で深遠な哲学や信仰であらうと、それらは人類が描いた虚妄にすぎないというのであるならば、あるいは、人類のこれまでの営みそのものが虚妄だとい

うのであらば、はたまた、人間を含む大自然界、太陽系や銀河系、さらには大宇宙のみならず、ミクロ宇宙からマクロ宇宙に至るまでの有り様はみな虚妄に過ぎないというならば、そもそもそういった世界に生かされている我々とは一体いかなるものかというのであらうか。ブッダ、このような虚妄なるものを実体だと思い込んで、しがみつくな。執着を棄てて、出家すべきことをうながされたと、仏教学の泰斗がブッダ親説で繰り返し主張する。

今の仏教はある時点で大きく本来の仏教を逸脱した・・・と。では、この世界は一体何であるのか？

この不可思議な氷像出現の現象を見て、今更ながら、現象と見えざる世界である潜在をブッダはどのように示されているのか、素朴な疑問が湧くのである。

確かに、こうして、夕べに、祈りを捧げるながらあれこれか思考している自分も、自分という自我である限り、ブッダが指摘される自己欺瞞に陥るこ

とは避けがたい。

しかし、一方、如来性や仏心という慈愛の根源を、虚妄にすぎない我々が一体どのように自覚できるというのであろうか。出家修行者がこれまでどれほどのものがこれを超越できたのか。

さらに、この日、本堂の本尊の前で自問していたのは、最近、物理学や天文学などで話題になっている「物質とダークマターとダークエネルギー」に関することであった。

我々が所属する大宇宙は、加速膨張

しており、それが時間の方向、すなわち、先験よりいまに経過し消失する歴史性を決めているのではないかという思いがあった。

十、ダークエネルギーとダークマターと物質化現象

門外漢なので、正確には述べられないが、その物理学の理論によれば、この宇宙で（ビックバン以降138億年を経てなお加速膨張している宇宙内）で、「物質」はわずか5%だけで、残

りの25%はダークマター、70%は

ダークエネルギーでみなぎっていないければ、物質の局所的宇宙は顕現し、存在することはなかった。そのダークマターとダークエネルギーは見ることでできない未だ正体不明のものであるが、それがなければ銀河は現れないという。というのは、銀河の構造を計算すると、普通の「物質」だけでは足りないことがわかっていて、見えている物質の重力だけでは星は散らばってしまい、銀河を形作ることができないということ

が明らかとなったというのである。

大宇宙の物質化で考えられるのが、光を通さず反射もしない何か暗いもの、ダークマターの存在が考えられるとして、観測を続ける内に、ダークマターは密集すると近くの光を曲げる重力的な力を持っていることがわかってきた。そうした何らかの力を及ぼすダークマターについてわかっていくことは、検出できないので、粒子の雲ではない。ガンマ線を出さないので反物質（アンチマター）ではない。周囲に影響を及

ぼす力はたくさんあるものの、ブラックホールほどではないので、ブラックホールではない。最近、ダークマターは光を受けない未知の粒子なのかもしれないともいわれはじめています。

小生は大宇宙の顕在化はこのダークマターの重力を伴う局所化の壮大なプログラムのようなものが背後にあつて、いわゆる、ミクロ宇宙の素粒子、電子、原子、分子などからマクロ宇宙の星雲、銀河、惑星、身近には太陽系の地球などに繰り広げられる壮大な天地創造の

進化の営みから起こっているのではないかと思う。この壮大なプロセスは、いわゆる、天地創造神やイデア、ロゴス、叡智、神、ブラフマン、アートマン、アーカシツクレコードなどの、いわゆる、遍在から局所へ、局所から遍在へカルマの輪廻を想定する古代宗教を連想させるが、もし、それが事実なら、ブッダ釈尊は「虚妄」を以て一体なにを指摘されたのであろうか？という際限もない愚問が生じる。

さらに、ダークエネルギーについて

は、ダークマター以上に不明なものはあるが、小生には、極めて興味深いものである。

1929年に天文学者のエドウィン・ハッブルが銀河から届く光の波長を調べ、赤い方に偏る現象を発見。この赤方偏移は遠い銀河ほど大きく、近いほど小さくなるので、ハッブルは「宇宙が膨張していることが原因」と結論づけ、空間が広がることで光の波長が伸び色が変わったと考えた。

近年、飛躍的に発達しつつある天体

観測により、なんと、大宇宙はビッグバン以降、決して膨れ続ける風船のような閉じられた宇宙ではない。そういう宇宙は膨張するがやがてスピードはゆるくなり、やがて止まる。そこから縮小し始めビッグクランチに至ると考えられてきたが、観測技術が発達するに連れして、その見解は全くひっくり返ってしまった。縮むどころか、宇宙はますます加速膨張しており、閉じられた宇宙ではないことが明らかになった。この、重力に反して、加速度的に

膨張させているダーク（見えない）エネルギーが、どんどん流れ込んで新しい宇宙空間を新生し続けているというのである。

このダークエネルギーには全物質よりも大きな、アインシュタインのいう「重力に反する力」よりも大きな力があり、生まれ続ける粒子で宇宙空間は満ちているが、それは現れてすぐに消えるものだという。そしてこのダークエネルギーが大宇宙の加速膨張の方向と時間の歴時性を方向づけているの

先験的エネルギーではないかという。

この物理学上の理論は、小生にとつては、非常に革新的に思えた。ブッダ親説を裏付けけるものであるからだ。いわゆる、時間の歴時性（過去・現在・未来の時間ではなく、先験が今に経過し消失しながら新たなものが創造し続けるというブッダの親説を裏付けけるものと感じられたからである。

現代の大宇宙に関する物理学や天文学を研究する科学者たちは、こうしたダークエネルギーにより、大半の宇宙

にはダークマターや物質の顕現できる余地は少なく、我々が観測している宇宙のようなものは重力と反重力の微妙なバランスの状態が出現してはじめて起こるといふ**全宇宙にとっては極めてまれな現象、すなわち天地創造の営み**であり、今ここで、人間として、壮大な宇宙を解明しながら目撃できることは、稀有のこととして喜びを感じているという。

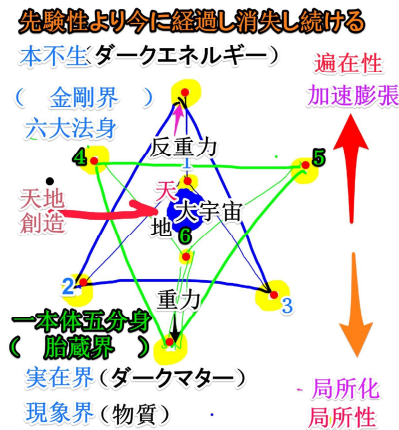
物理学者は風船やシャボン玉などを例に説明しているが、大宇宙が加速膨

張していてもその中にある星雲や惑星や物質なども比例的に膨張するのではないという点は、猛スピードで走る電車の車内と同じことなのだろう。地球や惑星の自転公転の巨大なスピードもその体内にあつては一緒に動いてる限り、その中での動きに限られている。このように、加速膨張していることを体感することは、そもそも、その外との関係をみない限りわからない。

これが、宇宙内の進化の基盤なのかも知れない。しかも、こうした重力と

反重力の微妙なバランスのとれた宇宙はきわめてまれであり、ほとんどは、現出しない宇宙なのだという。

さて、このような最近の物理学や天文学の理論に興味が湧くのも、いわゆるブツダの親説とこうした大宇宙の現象の解明がどこまで共通した展開になるかが知りたいという、ブツダ親説にも、最高の物理学にも全く疎いものの妄想幻想なのかもしれない。



十一、見える世界・見えざる世界

法圓寺に度々出現する氷像は、「見えざるもの」を思わざるをないものである。そこで、見えざるものをどのように理解すれば良いかについては、氷像に遭遇して以来、何故このようなことが示されているのか、絶えず思索している。（もちろん、「見えざる世界」を直視するものは、見えているのだから、このような愚なる思索は行わない。見ることに適わぬものがこれをどう理解するかである。）

おそらく、見える世界と見えざる世界のという関係は、まず、ダークエネルギーとダークマターと物質との関係によって一般的には解明されて行くのであろう。

少なくとも、死に際にその生命体が発信するさまざまな信号は肉体的・物質的レベルのものに過ぎないとしても、物質を取り巻くダークエネルギーやダークマター内の現象である。ダークエネルギーやダークマターは見えざるものであってもその存在は否定できなく

なってきたという。

いわば、物質化現象は海面（水面・川面でも良いが大宇宙的広がりの象徴で海面と言っているにすぎないが）に浮かぶアワのようなものである。

ぶくぶくとアワが生まれるかたわら、パチパチと割れて消失しし続ける。これは現象の喩えであるが、「先験より今に経過し消失する」現象のたとえである。

ここで問おうとしているのは、ぶくぶくと生まれた泡の一つが、パチッ

と言つて消失するときのことである。

事実は消えたということではしかないのだが、その泡を生み出すものはもちろん泡が消えたからといって消えるものではない。泡の元である池や川や海といえど永遠ではないからいつかは消えることもあるであろう。

物理学的に仮定されるダークマターもダークエネルギーもまたしかりであろう。

その生成生滅は泡のように一瞬であるものもあれば、大宇宙のように発生

して何兆億年後にというものもあるであらう。

物質現象から観れば単に生まれたものが滅するにすぎないと見える。エネルギー不変の法則がどの単位の宇宙まで適応するかは小生にはわからないが、少なくとも、これらのものはそのような生滅という現象は波束と局所化の仮の現象でしかないとされる。

物質もダークマターもダークエネルギーも名状しがたい全的存在の根底、すなわち根本、物質的・ダークマター

的・ダークエネルギー的生滅の背景、それは、時空に限定されていない根本存在の本、本不生。

いかなる意識のレベルにおいても補足しきれない大いなるもの。

ここで、問題になるは、全体性である。先験なる本不生は人間のあらゆる意識のレベルで把握されるものではないが、全体として矛盾なく統合されているのは、何らかの普遍的意識のようなものが機能しているとみられるが、しかし、人類が考え出す意識のレベル

ではない。

かといって、あらゆるものに具わっている繋がりや応答をしめす反応から、さまざまなレベルの信号を発せられているという現象は現実存在している。

人間の言語や脳科学的反応における応答、すなわち対話の原理がミクロ宇宙からマクロ宇宙に至るまで厳然と機能しているという理論があるが、ここで問題にしていることを考えるうえで、物理学における「対話の原理」はヒントを与えてくれる理論の一つではある。

局所内に条件付けられているものはその中で収束するものであるが、本質的にそれで止まらないものを考えざるを得ないのはそうした何らかの繋がりを無視できないからである。

物質がパチッと消滅してそれで終わりか。と言うことである。

ブッダは「消滅するものに執着するな」と言われた。その執着の背景にあるものは生命の五蘊である。五蘊であるわれわれのあらゆる五官六根の経験に基づく記憶の反応と概念による虚妄

性であることをブッダは指摘された。

しかし、消滅しても、終わりではない。その終わりではないもの。それを問うている。

もちろん、ブッダと物理学と一緒に論ずることは専門分野的にはカテゴリーエラーであろう。しかし、ブッダの直観も宇宙物理学も人類の真理探究の一環であることに変わりはないのだから、究極的には相即不離にあると思う。ブッダはなにを示されたのか。少なくとも大宇宙の進化のプロセスをブッ

ダはどうごらんになられるのだろうか。

それでも、素朴な疑問が残っている。

それはやはり、J・クリシュナムルティの革命的視点。あるいは、ブッダや龍樹の革命的真理では、「万物やそれを感じ受する脳や記憶や思念や意識、心など通じて実感しているものを実体と視ることは虚妄である」とされた点に帰ってしまう。龍樹が示す、真諦と俗諦は、こうした愚問を終わらせるためのものであったのか。すなわち、なぜ、宇宙に空間や時間の関係性が繰り

広げられているのであろうか？ たと
えば、薪を集め、風呂に水をくんで、
火をともし、風呂を沸かし、入浴する
という現実に行われていることが虚妄、
すなわち架空のことだとでもいうので
はあるまいに……。もしそうである
ならば、生存そのものも虚妄に過ぎな
いこととなる。ダークエネルギーから
ダークマターを経て、物質化するプロ
セスもまた虚妄であるなら、こうして
思考している自分もまた虚妄にすぎな
い。それとも、あれこれ考えているこ

と自体を虚妄というのであろうか。

実は正徳寺の阿弥陀如来の前で、そ
のような自問自答をし、思案に暮れて
いたのが正直のところであった。

願わくば本尊よ、われに、その本不
生の真実義を示したまえと祈らざるを
得なかった。



十二、再び問う、氷像の三角四面体

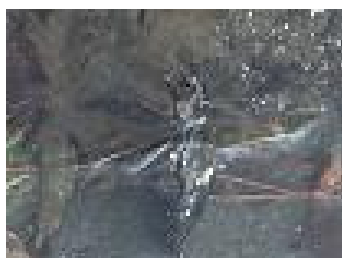
そして、その如来からの応答が、

平成二十九年二月二五日と三月十一日に、例の手水鉢に氷像として示されたのである。

脅威であったのは、示された氷像はすべて「三角錐の四面体」であった。

自然に生じたとはいえ、このときの氷像は、明らかにピラミッドの三角四面体である。まさしく、ハータツクの『エノクの鍵』で解説されている神聖幾何学「マカバ」そのものが氷像化し

ているのかと驚きを禁じ得ない。



ハータツクの『エノクの鍵』については、前にも述べたように、平成二十二年十二月末、研究所の帰り、池袋の書店でたまたま手にしたものであった。

驚いたことにその内容は恩師高橋が亡くなる直前小生に明かした不可思議な内容（ほとんどのものが知らないであろう内容）に酷似していたのである。正直、ほとんど忘れかけていたことであつたので（なぜいまさら！）の感が免れ得なかった。

恩師高橋信次が昭和五十一年五月に、

たまたま側にいた小生にかなり真剣に語っていたことだったが、「見えざる世界（彼は太陽系霊団と表現していた）における九人評議会における内容」に酷似している。高橋とハータツクの表現は双方かなり異なるものだが、全体の論旨の構造は二人とも一緒であるように思われる。虚妄であるかも知れないが、同質の「見えざる世界を扱っている。」と、直観した。

ということとは、やはりこうした「見えざる世界」は否定できないのである

うか。

法圓寺に度々顕れ続けるこの三角四面体の氷像を前にして、単なる「氷の三角錐」の自然現象では済まされない特異性を感じる。これは由々しき事態ではないかとさえ思うのである。

平成二十九年二月二十五日と三月十一日と立て続けに出現してきた三角四面体の氷像は、かれらの指摘する「地球上における人類の意識の大転換をはからねばならないときが、いま」であることを示唆するのであろうか。彼ら

が共通して警告を発する天変地異を予見するものであるなら、これから地球上でいかなることが起きてくるというのであろうか。厳粛ながらも非常に緊迫した面持ち今日まで過ごさざるを得なくなっている。なぜなら、この氷像現象出現以来、世界では明らかに、大地震、異常気象、新型コロナウイルス感染、ロシアに依るウクライナ侵攻など不穏な情勢がますます事実化している。これらは、すでに、昭和四十七年から昭和五十一年頃に、ハータックも

恩師高橋も「見えざる世界」から見て
いるかのような惨状にを警告していた
のである。

まさに、自然現象に過ぎない氷像と
いえど悔るなかれと言いたい。

まして、「森羅万象すべてが如来の
説法」であると、弘法大師空海は述べ
ている。

「如来の声」を聞かねばならないと
思う。専門職を標榜する優れた宗教者
や学識者や著名人は数知れないが、こ
うした見えざる世界の声に対する謙虚

さはどうであるのか。よけいな世話で
はあるが、そこはきわめて。重要であ
ると思っている。あらゆる宗教の経律
論の背後にある深い哲理と直観性。そ
の根底に流れる「慈悲」を以て、真俗
二諦を直視し、虚妄や欺瞞を打破し、
人類社会に革命をもたらしてこそその存
在ではないのか。小生、彼らの末席に
も着くことのできない愚者だが、激し
く自戒せざるを得ない。



十三、三角四面体マカバ

三角火輪の始動

さて、この氷像の神聖幾何学の造形が指し示すものとは何かについて、愚考ながら、いくつか考えられることを挙げておきたい。

① ダークエネルギーからダークマターそして物質化のプロセスに、それこそ「マカバが宇宙レベルで作動する」ということ。

② JJハータックの示す「マカバが顕れるとき、人類は次元移動せざる

を得ない大転換期に入った」ということ。（ダークマターと物質界における一次元から十一次元における進化論的天地創造と捉えた場合）

③ 恩師高橋やJ・J・ハータックが語る、人類の核戦争勃発の危機を回避すべく、人類の不調和な意識を浄化するプロセスとして「マカバ」が始動し、見えざる世界と現象界を繋ぐ大調整を余儀なくされる事態が切迫しているということ。

いま、まさにいま、世界はあらゆる

ところで、自我に同一化し、欺瞞に満ちた権威主義的宗教やイデオロギーが蔓延している。

エノクの鍵にあるように、世界中で不穏な動きが広がり、現実にならず者国家による核戦争が一触即発あることは現実化している。この人類の問題を何とか阻止すべく、われわればかりでなく、見えざる世界でも動かざるを得ない状況なのであろう。

しかし、現象界に問題は現象かいに生きるわれわれ自身の行動と責任にお

いて改革していかなばならないのである。如来といえど取って代わることはできない。ゆえに、人類の不生の仏心、即ち心の中から働きかけて自己改革を起こさしめるということなのであらう。（恩師高橋は息を引き取る間際にそのような趣旨を語っていた）

しかしながら、人類にのみ任せていてはこの世界の危機、この地球上に住む生命体にとっては取り返しの効かない過酷な状況に追い込まれることになるので、警鐘を鳴らし、魂の救済シス

テムとしても「マカバ」が始動していること。

確かに、核による破壊にせよ、自然災害にせよ、犠牲者はおびただしいどころか、全滅すらを免れ得ない大惨事を招いている。

そのときマカバが個々の生命の大移動をひき起こし、次元移動をはかるというようなとてつもないことが起こるというのだろうか。

④ そこで、最も重大なことは、「大宇宙の進化がマカバによる互換重

合渉入を通して、ダークエネルギーが歴時的に今に経過し、ダークマターと物質界という全く新しい創造世界に刻々に創生していること」である。その、エネルギーの顕現は、宇宙の進化とともに歴時的に常に「いま・ここ」に顯れている。

天地一切が局所化する時間と空間における進化であろうと、遍在性において、つねに、いま・ここ。如来も素粒子も常に、いま・ここにある。顕現し消失するプロセスによって、常に新た

な歴時的互換重合による渉入の現象が起きているという実相を理解することである。

法圓寺に度々出現する氷像の三角四面体出現の自然現象をまのあたりにして、そう受け止めざるを得ない。



十四、光り輝くものへの祈り

いかに、光り輝くものである遍照金

剛からのマカバが働いても、誤った人類のエゴが、地球環境を破壊してきたことは、過去に何度も経験しており、地球自身にその痕跡が残っている。今回も、また、そのような危険性を孕んでおり、天変地異がその警鐘を鳴らしていると思う。

そこで、弱小なるがゆえに、氷像を前にして、非力極まりないものではあるが、マカバを通じて、全ての有情

（万生万物）に対する叡智が成就されるよう、祈るしかない。

「光り輝くものよ、六大法身全ての【われ】をして、法眼圓明なる【慈悲と愛と叡智】の大いなる【マカバの光明】に満たし、【不生の仏心】たらしめたまえ」

ビルシヤナブツ ビルシヤナブツ
ビルシヤナブツ

ヴェカラー ゼエルゼ ヴェアマ

カドーシュ カドーシュ カドーシュ

ヨッドヘー ヴォッドヘー ツエヴ

アオツト

メロー ホル ハアレツ ケヴオドー

ギヤーテー ギヤーテー ハーラーギ

ヤテー ハラソーギヤーテー ボージ

ソワカ

十五、思索の根幹

〈注：龍雲の思索の根幹〉

●【マカバ】二つの三角四面体の正反の回転から読み取れること。

●【マカバは両部不二として作動】

●【マカバが「阿字本不生の先験より

今に経過し消失し続ける」実相のなか

で、ビッグバン以降、大宇宙のダーク

エネルギーからダークマターそして物

質を新生創造し続け、森羅万象を導き、

時間・空間・次元における現象（虚妄

性）をミクロ宇宙からマクロ宇宙全て

において、互換重合渉入して、時間・

空間・次元の変換を自在にし、超越し

て、光り輝くものが一者として統括す

る。】

● 遍在性と局所性

● 梵我

● 斥力と重力

● 天地

● 陰陽

● 金剛界と胎藏

● 男性性と女性性

● 愛染明王・不動明王金胎両部不二

● 般若理趣經

● マカバが働いていなければ大宇宙

も我々も一切が現象化しない。

● マカバは光り輝くものの慈悲と愛

と叡智の三位一体の火炎の如きエネルギー

ギ変換を起こす。

● マカバは如来の三密とわれわれの

三業を互換重合渉入（加持感応道交）

する原理である。

● 神聖幾何学体の三角四面体は光をあらわし、光の三原色から七色の光・無数の色光に偏光するが、一切のものと現象が光を帯びて統合されているものであり、それは宇宙の本質と現象である体・相・用の光り輝くものすなわち普賢金剛薩埵がマカバを通して働きかけている。

● マカバは一者であり遍在であるものを光り輝くものとして顕現せしむる。

●マカバについてはプラトンにおい

ても「万物を構成する元素として、地

・水・火・空気の四大元素を考え、正

六面体（地）、正二十面体（水）、正四

面体（火）、正八面体（空気）」を当て

ている。これは仏教の五輪卒塔婆にお

ける地

（□・正六面体）・水（○・正二十面

体）・火（△正四面体）・風（月）・空

（寶珠）にも通じるものであり、三角

は火輪すなわち光であり、金胎両部不

二は二つのマカバが不二であることを

示している。

十六、聖なる氷像出現！ 第8回目

平成三十年一月二十二日 法圓寺複数

の檀家墓に氷像出現

この氷像は、この日、お墓参りをさ

れてた檀家さ

んからの通報

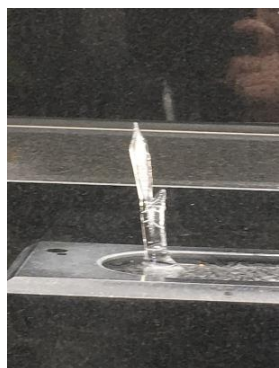
により発見さ

れたものであ

る。



お墓の水鉢に氷の聖像が出現してい
るといふ。確認すると、不動明王の剣



のかたちをした氷の柱が上に伸びていた。しかも、お墓には阿遮院という戒名が刻されていた。この阿遮院とは、まさしく不動明王のインド名からきている。このときの話しによるとこの方のお墓にも度々氷象が出現しているようだ。この方の携帯の写真を見せてもらったところ、なんとも不思議に不動明王の梵字カンマンまである。もちろん、梵字だと思ったのは



小生で、この方一般の方だから、それが梵字だとは知らない。そして、今回の氷像は、「不動明王の剣」であった。ほかにないかと寺族と法圓寺墓地を探したところ、この日は複数の檀家のお墓に不思議な氷像が出現していた。ちなみの他寺のお墓には出現していなかった。

十七、聖なる氷像出現！ 第9回目

令和四年一月二十二日早朝

令和四年の正月は例年にない大雪が続き、寺もすっかり雪に埋もれていた。突然、檀家さんから「自分のお墓に不思議な氷の像が出現している」という知らせを受ける。

令和四年一月二十二日早朝のことである。早速、その墓所を確認したが、この写真のように確かにはつきりと出現している。ほかの場所を確認したが

氷像が顕れていたのは此処だけであった。



法圓寺では以前から不思議な形をした氷像が出現するが、このように氷が上に伸びて不思議な造形なしてくるという現象は法圓寺以外ではあまり聞いたことがない。（法圓寺の情報を得て、

自分のところにもというかたも何人かおられたが、きわめて曖昧である。)

この冬は例年になく大雪で、いつも出現している寺の境内の手水鉢はすっかり雪に埋もれてしまっていた。

(この雪がすっかり溶けるまでは氷像現象は見られないだろうと)と、全く忘れていた。ところが、この日、墓所に氷像が現われているという知らせには、さすがに驚く。大雪で、大半のお墓は全く大雪に覆われていたからだ。しかし、この方は、毎日、欠かさず墓

参をしておられ、雪を掻いていた。

さて、知らせを受けて、この氷像を見ながら、非常に「危惧する思い」があった。



というのも、

この氷像が

「鳩」に見えるのだ。水面の氷上に映る

その影は、まさしく、平和の象徴である鳩そのものではないか。しかも赤いものが水面に映っている。(不吉な予

感がしたが、これはお墓の側の南天の木実の影であった）何故か、この鳥の影は、見えざる世界から必至に何かを訴えているそのように感じられてならない。

そして内心、もしかすると、いま、世界は、逆に、「平和」がいちじろしく脅かされ、非常に危いということを示しているのであろうか？・・・われわれ人類の愚かさが再び戦争を引き起こしかねないことの警告なのであろうか？しかも、いま最も懸念されている

るのは、「核戦争の危機」である・・・そういった危機がやってくることを、見えざる世界は、この氷像を通して伝えているのであろうか？

心中穏やかならざるモノがあった。

小生が、そういう懸念を抱くのには理由がある。それは、何度も前述するように、昭和五十一年五月に、恩師（高橋信次）が、病身をおして、たまたまそこにいた小生に向かって、実に不可思議なことを語り出したこととあまりにも酷似するものがあったからである。

（恩師高橋信次は昭和五十一年六月に
他界。恩師の「最後のことば」であつ
た。この内容を直接聞いた者は他には
誰もいなかったし、小生も長い間黙し
ていたので、これは小生にしか記せな
いものなので、この大変な時代に、一
つの見えざる世界からの記録として留
めておきたい。）

十八、恩師が語ったこと

それは、昭和五十一年五月も終わりに
ちかい頃、ひとり、そのビルの三階

の事務所にいた小生の側に、五階から
降りてきた恩師高橋が傍らに座して、
こう話されたのである。

「地球における人類の物質的に偏つ
た意識と行為が、今後、地球上に大き
な天変地異を引き起こす引き金となる。
人間の最大の問題は、これまでもそう
だったように、欺瞞に満ちた宗教や権
力主義的イデオロギーが傲慢にも闘争
や破壊や搾取を繰り返し、人間ばかり
ではなく地球そのものを破壊していく。
地球そのものにも意識のあることを

忘れてはならない。人類の乱れた意識が天変地異を引き起こすのである。

自然の中の一部でしかない人類が、

自己中心的欺瞞と搾取を繰り返すことで、世界の格差は深まるばかりで、搾取されるものの悲嘆はますます増大し、それが混乱の引きがねもなる。いまや人間は、おろかにも、核戦争のボタン押しかねないところまできている。核戦争のボタンを押してしまったならば、取り返しはきかなくなるであろう。

これまでの戦争と全く異なる惨状に陥

る。これをなんとかしても止めねばならないならないと天上界の大天使達は躍起になっている。

しかし、この世での小生には、もう、時間も体力もない。この事態を止められないのであるならば、やむを得ない。小生は天上界に赴いて、天上界から人類ひとりひとりのこころを内側からこじ開けてでも、人類にこの危機に目覚めさせ、意識の変容を遂げさせねばならない。

君よ、決して、忘れてはならない。

この危機的状況を回避すべく、意識的に連動している地球も、また、見えざる世界にある如来や大天使たちも、いま、必至に対策を講じているということを……。小生は昨夜、大天使たちの重要な会議に出席していた。君はこの話しに怪訝をいだいてはならない。君自身も、本当なら、見えざるものを見れるようにならなければならないのだ。

いいかね、見えざる大天使たちは、いま、非常に真剣である。人類の意識

の乱れが、そもそも異常気象や大地震、飢饉や疫病、はたまた様々な戦争が起こしているのである。こうした人類の誤った方向性は地球という魂の貴重な修行の場を破壊してしまっているのだ。この地上に生きているものばかりでなく、地上に縁のあるあらゆる魂が塗炭の苦しみに陥ることになるであろう。そうなつてからでは遅いのである。

君よ、よく考えなさい。これまで、人類はいったい何をなしてきたというのであろう？ 釈迦やイエスのような覚

者が顕れてきたとはいえ、彼らの本当の教えは、いまにいかされているのであろうか？

彼らはイデオロギーや宗教により自己の正当性ばかり主張し、正義を標榜しながら、本来の普遍的な教えの真実を見失っている。だが、宗教であろうがイデオロギーであろうが、そのそもその原因は、われわれの自己保存と自我我欲にある。このことを自覚せず、ひたすら権威に依存し、逃避するといふ、自己欺瞞に陥ってきたからではな

いのか？

こうしたエゴイズムは物質界にあるもの達の恐怖心をベースに、とうとう、人類は、神や大義や正義をかざした偽善の下に、人々の心を食いものにして、平気で自他を抹殺し、侵略と戦争を常に正当化する、全くのならず者となり下がり、この蛮行を繰り返し、世界を取り返し利かない窮状にますます追い込むのである。

しかし、君よ、よいかね。大事なことは、いかに、如来や仏陀や菩薩や大

天使群が見えざる世界からこの現象界に警鐘を鳴らし、気づかせようと救済に必至であっても、この現象界に生きているものの責任は、この世にあるわれわれ自身にあるのだ。われわれ自身でそれを止めなければならぬ。われわれ自身がこの深刻な問題に気づき、どう行動していくかにかかっているのだと言つても過言ではない。この世界に住むものに全てが託されている。それゆえ、もし、この世界で、狂気に走るものがあれば、たちまち連鎖的に戦

争に突入することも起こりうる。この世界に地獄をもたらずか、極楽をもたらずかは、ひとえにいま、ここに生きるわれわれ自身にかかっているのだ。

ゆえに、人類ひとりびとりが地獄の沙汰となるような狂気の意識を悔い改めねばならぬ。意識の変革を起こさねばならぬ。このままでは、百千万劫にも遇いがたい、大宇宙でも希なる、かけがえのない魂の修行の場である「地球」そのものを破壊してしまいかねないのだ。

それゆえ、大天使たちは必至である。病身の小生はまもなく見えざる世界に帰らざるを得ないだろう。だが、それでも、みえざる世界から、この地上に生きるひとりひとりの心をこじ開けて、警鐘を鳴らし、光り輝くものとして、人々の意識を直し、その変容を促してかざるを得ないのだ。」と。

この恩師の話は実に壮大ながらも壮絶極まりないものであった。この話を聞いた者は、その時、たまたまたったひとり側にいた小生だけであった。お

そらく病が重く、数多くいる高弟子たちもこの日は忙しく不在であった。また、ひとを集めるだけの時間のゆとりが全く無かった。「とにかく、誰でも良いから、この見えざる世界の重要な意志を、事実として伝えておかなければならない。」

それがこのときの恩師の切羽詰まった状況であったのだろう。普段は温厚で気さくな恩師ではあったが、このときばかりは鬼気迫るものを感じた。話し終えて、恩師は、まだ、切迫感は残

るものの、ただ呆然としている小生を見て、軽く笑われ、穏やかな口調に戻られたのであった。この恩師は晩年、小生を見かけると、不異に、語りかけられることが多かった。「君は、これから五年の間にわたしの話を裏付ける二十冊もの重要な書物を手にすることになる。それで、私の話の内容が奇異なものではなかったことを理解するであらうし、人々も理解するであらう。君は、これから、心が毒されることのないように、一步一步精進していく

ことが大切だよ。私の元にいたのだから、見えざる世界が見えて、聞こえて、話せる僧侶となることだね。」

この後、恩師は、山形における研修会を最後に（ドクターストップがかかっているのだが病身をおしての講演をしなければならぬのだよと小生に告げられてでかけられたのだが）、それから程なくして、昭和五十一年六月に他界された。恩師四十八歳、小生二十九歳であった。

前述しているように、恩師の最後の

話を聞いてから、だいぶ経ってからのこと、東京のブックセンターで平成二十二年十二月、なにげなく手にしたある翻訳本をみて驚愕した。恩師の話を裏付けるかのような驚きの内容であったのである。しかも、恩師は時間がなかったせいか、骨子だけであつたが、この書物はその意味するところを補完してあまりあるものがあり、きわめて詳細に記している。（恩師が言い残していた、小生が手にする二十数冊目の書籍でもある）

十九、ハータツクの『エノクの鍵』

『The Keys of Enoch®:Introduction』

『エノクの鍵』

「・・・ハータツク

きわめて広範囲にわたる難解な大著ではあるが、内容の一例を挙げると以下のようなものである。

「いま地上の権力を支配しているのは高次の天界から墮落した者たちで、小生たちがおおぐま座と呼ぶ天体に居住し、その境界の出入り口から、高次の天界から小生たちの局所体系へと通

じる、主要な進入口のひとつを管理しているのです。かつての進化の周期に存在したマスターたちがどのような経緯でそのような星々に送られたのか、そして彼らが現在はそのから、低次の惑星世界と、それぞれに課せられたカルマの罰則をどのように管理しているかを小生は教えられました。そして小生は、地球が、堕ちた思念形態と聖なる思念形態の両方をもちいた生化学的な実験領域の一部となっているのを見たのです。おおぐま座・こぐま座・北

極星・トウバーンといった領域に住む墮天使たちの操作するこの実験は、どのタイプの知性が、物質的輪廻をかぎりなく繰り返す存在形態から、最終的に地球そのものを解放するにいたるかを見極めようとするものです。既述の領域に住まう存在のなかには、低次の領域において強引に自ら神を名乗るような、不完全な光の体をまとうものたちもいます。

やがて小生はその星域から、アルクトウルスという中間拠点へ連れて行か

れました。そこは、小生たちの銀河のこちら側で父に仕えている銀河評議会の主要なプロブラミング・センターで、小生たちの局所宇宙の運営組織である「九人評議会」の指揮下にあります。そこでは、小生たちの空間領域に関わる諸惑星についての決定を下す霊的同胞団の使用するネットワークや法廷を見せられました。」

いわゆる「見えざる世界」と「地上界」がリンクしていることを示すこの二者の話の内容は、小生にとって、こ

の相似性はおどろくほどであった。このとき、小生は「ブツダ親説」を基盤にしていたので、この類いの話は、法圓寺で頻繁に起こる氷の三角四面体等の出現の現象とともに、全く不可解なものであったので触れえないものであった。

だが、世界の現実をまのあたりにして、無視できない思いが強くなっている。

それは、こうした見えざる世界の意に反し、令和四年二月二十四日、ロシ

アのウクライナ侵攻を止められなかった地上界における国連の機能に落胆せずにはおれなかったからだ。天上界の大天使の評議会の写しとさえ思っていたが、「常任理事国が国連憲章に違反して軍事侵攻を開始する」という、十九世紀にでも戻ったかのような世界戦争の最大の危機状況に陥ってしまった。はたして、世界がこの問題をどう解決していけるというのであろうか。

それでも、高橋やハータックが示す天上界の大天使たちの機構が反映し、

どう機能できるというのか。か。これらを嘲るかのようなロシアなどの軍事侵攻ばかりではなく、洋の東西を問わず抱えている軍事力に依存する軍事国家の脅威。人類が抱えている力の侵攻の問題（軍事ばかりでなく情報や経済などあらゆる暴力的搾取的侵攻）が如何に破滅的であるか。ロシアのような国家体制にある国々が、示し合わせて、同時多発的に軍事侵攻を起こしたならば世界はどうなってしまうのであろうか。悲惨な戦争の苦悩を二度ともたら

さないそういった願いを虚しいものと
し、しかも、いま、新型コロナウイルス
感染症の問題に世界が懊悩している
というのに、人為的に戦争に踏み切る
ものの大義名分はどこまでも悪魔の詭
弁にすぎないように思えてならない。

さて、話を戻して、今年の一月に出
現した氷の聖像も、潜象の世界から氷
の聖像が現れているとするならば、こ
の「鳩のようなもの」は何を示してい
るのだろう。

二十、聖なる氷像出現！ 第10回目

令和四年一月三十日早朝

実は、ロシアによるウ
クライナ侵攻が始まる
前、世界が危機的状況に
あることを知らせようと
するかのように、一月三



十日早朝、今度は、全く予測もしてい
ないところに、別の氷像が出現したの
である。本堂の正面の階段脇の桶であ
った。写真のように、あの「三角四面
体」が複数出現していたのである。例



によって、すぐほかのころを探してみたが、やはり

一ヶ所だけであった。しかも、いつもの「手水鉢」はまだ雪に埋もれたままであった。ということは、今回は、

まるで、（大雪で皆覆われてしまっていて、氷の現象を出して気づかせようにも現象を起こしようもない。しかし、ことは重大な局面にある。安閑としていてはならないのだ！なんとしても気

づかせねばならない。そのため、再び三角四面体を示すべく、まるで当たり前次第に可能な場所を見つけ、おまえが気づく身近なところに現象を出したのだ！）といわんばかりのようであった。



こうして繰り返し示される氷の聖像に、「これには訳があるのかも知れない。見えざる世界が、われわれ人類に何かを必至にい伝えようとしている。かなり危惧を抱いているのではないか？

三角四面体マカバがの天地・自然・宇宙の森羅万象をコントロールせずにはおれないという非常事態が差し迫っているのではないか」という危惧をいだかざるを得ないでいた。

二十一、明け方に明星と五鉗金剛杵が

翌朝、明け方まだ暗い内ではあったが、いずれにしても、何の取り柄もない自分ができることは、せいぜい戦争回避のために祈るぐらいのものだから、本堂で自分なりの修法をしていた。修法といえば、あるときだったが、真言の修法中、五鉗金剛杵には「潜象と現象は一体である天地の創造秘儀が込められていること」を感じとってからだいぶ久しい。

それは次のようなものである。

五鈷杵は、「潜象と現象の三角四面体が流動し回転している天地創造の原理であり、その芯に、不生の仏心が全一なる宇宙の偏在性と多次元なる局所性の核心となって構成している正反マカバの三角四面体のはたらきを如実に示してる。」修法しながら、遍照金剛空海大師は一体どのような思いで五鈷杵を手されておられたのだろうか？ふと、そういう思いがわき上がった。

遍照金剛空海大師が請来された五鈷杵が東寺伝わり、国宝となっている。

弘法大師が宮中の真言院で修法なされて以来、今日まで続く「後七日御修法」という世界平和と安寧を願う祈祷がある。真言宗十八本山の長老が最後の修法とされる真言最高の大修法において、今日でも、大導師が弘法大師が請来された密教法具を初めて手にして



祈祷されるものである。この大師請来



の国宝の法具をよくよく観ていると、

まさしく、あの氷の三角四面体によって導かれた構造を余すことなく形状化していることに気づいた。とはいえ、

大師請来の五钴杵を手にして大法を修することなど、末寺の愚鈍僧にはとう

てい叶わないことである。そういう高尚な大阿闍梨は

他に沢山いるのである。

しかし、この身近に顕れてくださる弘法大師を思うとき、いま、世界は非常事態にあるというのに、無力極まりない自分であることを恥じざるを得ない。愕然とする思いである。

この日、まんじりともせず、夜を過ぎ、暗いうちに、修法を終えて外をみると、東の空に、一本の杉木立の葉群の間から、細い「三日月」が掛かり銀色に美しく輝いているのが目にとまる。そのやや下方に「明けの明星」が

キラキラと輝いている。まだ明けやらぬ空は、しかし、凜として澄みきっていた。そういえば、空海大師が四国の室戸で「虚空蔵求聞持の法」を修行しておられたとき、「明けの明星（金星）」が御自分にはいられたと言っておられたなことを思った瞬間、ある気配を感じた。（南無大師遍照金剛・弘法大師空海・・・）



この気配を感じるまましばらく佇んでいる。（そうか、あの銀色に輝く細い月は五銚杵、あの明星は大師のことか・・・）この気配を感じて以来、この不思議な氷像が出現するのは「遍照



金剛空海大師がここに在して御修法下さるからなのだ」と感じている。

遍照金剛空海大師が見えざる大曼荼羅会に在しながら、人類がこの危機を乗り越えられるよう身を粉にして御修法下さっておられるというと思い、突然、満たされた。

更にその見えざる気配は（煩惱の雲を取り除けるのはまさに「光り輝くもの」のみである。この光り輝くものは、人類にとっては神とあがめられてきた。しかし、人類はことあるうに神の名

のもとに、おろかな戦争を繰り返している。人類は、如実知自身をもって、自己の浅ましきみつめ、それを自覚し、悔い改めないかぎり、いかなる神への信仰も無明に過ぎない。彼らは神二祈り、聖なる戦いをしているというが、まさに、神を見ず愚かな人間のエゴにしばられ相争うばかりである。今こそ、よそ事とはせず、人類の罪業深き所業の事実を直視し、如実知自心によって全的な変容を遂げねばならない。）と語られたような気がした。このあと、

部屋に戻ると、そこに、不思議な書物が届いていた。（取り寄せていたものだが）

その書物は、絶版の古本で、「読み人知らずの『不可知の雲』』という書物であった。内心、（嗚呼、これは、「光り輝くものの、救済のための最後の書」なのかもしれない。

おもむろに、この書は開くと、お！なんとそれは中世の修道院で読み継がれてきた書であった。

そこには、今、思念していた、まさに

とうのものの、即ち、人類ひとりびとりがひたすら神・光り輝くものの慈愛に氣づくべく、欺瞞の雲を晴らすあるがままの観想の手引き書であったのである。

二十二、不可知の雲

ビルシャナブツ ビルシャナブツ

ビルシャナブツ

ヴェカラー ゼエルゼ ヴェアマ

カドーシュ カドーシュ カドーシュ

ヨッドヘー ヴォッドヘー ツエヴ

アオット

メロー ホル ハアレツ ケヴオドー

ギヤーテー ギヤーテー ハーラーギ

ヤテー ハラソーギヤーテー ボージ

ソワカ



ロシアによるウクライナへの軍事侵
攻の惨状をまのあたりにして、激しい
憤りをおぼえる。国連や安全保障条約

機構などの国際的安全の規範を完全に
無視し、しかも、核兵器によるせん滅
をも辞さないという構えで戦争起こす。
しかし、これに対して、この挑発に乗
って世界大戦に及ぶことのないよう必
死の対応をとっている世界だが、未だ
侵略の蛮行を止められずにいる。極悪
非道の破壊と無差別攻撃を繰り返すプ
ーチンの戦争をだれも止められないと
いうのか。実に愚劣極まりないなら
ず者の侵略の前になすすべはないのか。
恐ろしいことであるだけに、世界は全

く無力であつてはならない。

現実化したこの極悪非道の問題に対し、人類がどう向きあうか。世界人類は存続の危機に立たされているのだが、大方は自己保存に汲々としているだけである。

法圓寺において、すでに、こうした人類の愚行を危ぶむかのように示された氷像出現をまのあたりにして、忸怩たる思いである。

「なぜ、見えざる世界はこの蛮行を止められないのか。あくまで現象界の

人類の責任において、人類自身が、この戦争を止めなければならないからなのだろうか。」そのことだけが気がかりであつた。

そのような折、不可思議にも『不可知の雲』を偶然手にし、開いてみるとそこには次のようなことが記されていた。



「祈りとは、その本性において、善を獲得し悪を除去するために、神に向けられた敬虔な志向にほかなりません。

ところで、すべての悪は、原因としても存在としても、罪のうちに包含されるものであるゆえ、われわれが悪を除くために熱心に祈らんとする時は、

「罪」というこの短い言葉以外の何事にも心を向けることなく、他の多くの言葉を話したり考えたりせぬようにしましょう。われわれが善を獲得するために熱心に祈らんとする時は、「神」

という言葉以外の何事をもまた他のいかなる語をも、言葉の上でも思考の上でもまた欲求の上でも、叫ばぬようにしましょう。なぜなら、すべての善は、同時に原因としても存在としても神の内^①に在るからです。（中略）

ただ聖寵のみにより得られ、あなたが用いるように神から促された言葉以外は、祈りに用いるに他の言葉を以てしてはなりません。しかしもし神がこれらの言葉を用いるようあなたを促し給う場合には、それらを捨てることの

ないよう忠告します。」

何気なく記されている「ただ聖寵のみにより得られ、あなたが用いるように神から促された言葉以外は、祈りに用いるに他の言葉を以てしてはなりません」と言う表現に心が止まる。

「ただ聖寵によってのみ得られる祈りの言葉」とは何か。

「不可知の雲」の先にある「神の愛」が「忘却の雲」の下で愚かな「欺瞞と暴力という原罪」に苛まれる人類の愚かさを解放させる「神愛」なる

「聖寵の祈り」とはいったい何であるか。当然、その性質上、この書を精読すれども聖寵による祈りの言葉が直接記されてはいなかった。

やはり、全き信仰の「観想の目」を以てしないとかかる聖寵の祈りの言葉はわが密教における真言のように証されないものであるというのだろうか。秘密には如来秘密と衆生秘密があるように・・・しかし、世界は最大の危機に見舞われている。愚人が聖寵の域に達しうるまでを待っていたのでは、

永遠に救いはないだろう。いま、燃えさかる禍の炎を消し去ることができなければ、滅びるしかないであろう。

そう思いながら、この書を傍らに置いて立ち上がる。すると、ちょうど置いてあった『エノクの鍵』に手が触れ、その本がバサリと落ちる。そして、偶然にも、あるページが開かれたのである。そこには、ヘブライ語の不思議な文が示されていた。調べて見ると、それは、「イザヤ第6章3節」にあることばであるという。

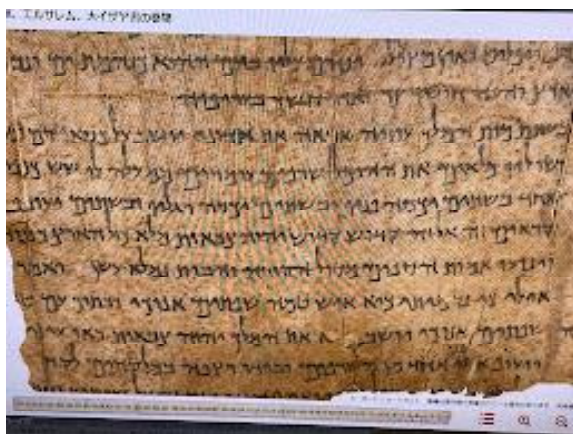
二十三、「イザヤ第6章3節」

ヴェカラー　ゼエルゼ　ヴェアマ
カドーシュ　カドーシュ　カドーシュ
ヨッドヘー　ヴォッドヘー　ツエヴ
アオット
メロー　ホル　ハアレツ　ケヴォドー
（そして声を上げて　互いに　言った
聖なるかな　聖なるかな　聖なるか
な　万軍の主　ヨッドヘー　ヴォッド
ヘー　全地に　彼の光が　満ちてい
る）

このヘブライ語の文を見て、まさに、
これは「ただ聖寵のみにより得られ、
人類に対し、神から促された言葉」で



あると思い、全身に稲妻が走り、魂が
打ち震えた。



さらに 紀元前八世紀に預言者イザヤによって書かれたこのイザヤ第6章3節を調べてみると、その第6章に11節からの内容は、まさに、いまロシアによるウクライナ侵攻の惨状とオーバーラップするものがあり、戦慄が走った。

「イザヤ第6章11節」

「彼は言った。

町々が廃墟となり、住むものが全くない。家々には全く人影がない。

そして、大地は荒廃し、崩れ去ると

きまで。

主は、人々を遠くに移される。

国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。

なお、そこに十分の一が残るが、それも焼き尽くされる。

切り倒されたテレビンの木、また、

樫の木のように。

しかし、それでも切り株は残る。

その切り株とは、聖なる種子である。

仏教僧である小生にはヘブライ語の

聖書は全く不案内である。したがって、これが聖書の文脈上、何を意味するのかその全体についてはわからない。この後に救い主インマネール（イエス）出現がの予言されているという。よって、小生のような門外漢が、この世界に分け入ることは不遜きわまりないものである。そもそも小生には至難の業である。

では、なにゆえに、いま、ここに、

ヴェカラー ゼエルゼ ヴェアマル

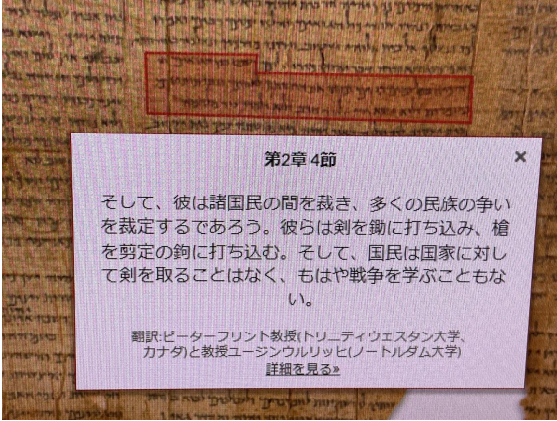
カドーシユ カドーシユ カドーシユ
ヨッドヘー ヴォッドヘー ツエヴ
アオット

メロー ホル ハアレツ ケヴォドー

なるものが明確に示されたのである
う。

門外漢であるからこそ、『不可知の雲』がいうように、「ただ聖寵のみにより得られ、あなたが用いるように神

から促された言葉以外は、祈りに用いるに他の言葉を以てしてはなりません。」と恩寵が顕れたとしか言いようがない。



さらに、驚いたことには、国連ビルの礎石には、このイザヤ書2章4節が刻まれている。

「イザヤ第2章4節」

主は国々の争いを裁き、多くの民をいさめられる。

彼は剣を打ち直して鋤きとし

槍を打ち直して鎌にする

国は国に向かって剣を上げず

もはや 戦うことは学ばない。

They shall beat their swords into plowshares,

彼らは剣を打ち直して鋤とし、

and their spears into pruning hooks;

槍を打ち直して鎌とする。

nation shall not lift up sword against

nation,

国は国に向かって剣を上げず、

neither shall they learn war any more.

e.

もはや戦うことを学ばない。(イザヤ

2:4)

二十四、混迷の時代に啓示される

「イザヤ書」・恩寵・ブッダ親説

ブッダは「人間ひとりびとりが自己をあるがままに観察する気づきを持つて悪業深い自我の性からの脱却」を促された。「真実の中に偽りを観じ、偽りの中に真実を観じ、真実を真実観じ、偽りを偽りと観ずる」ことで、人類の変革を促されている。「世界は自身であり、自身は世界である。」自我の欺瞞性を棄てて、いのちに対する深い洞察によって自己変革を人類ひとりび

とりがおこす日はあるのであろうか。

ブッダは語る。「人間というものありとあらゆる不安、暴力、絶望、恐れ、強欲、たえまない競争心を抱え込んだまま、社会と呼ぶ一定の構造をつくりあげてきたという事実。その社会には、それに特有の道徳性と暴力性が備わっている。よって、人間として、人は世界中で起きているどんなことにも——戦争や、紛争や、内外で起こっている葛藤に対して責任がある。われわれ一人ひとりに責任があるのだが、

われわれの多くがそれを本当に感じているかどうかは、疑わしい。」と。

読み人知らずの『不可知の雲』も、その全体を通して、ブッダの気づきに通じる観想法が脈々と示されている。

そして、この度の「恩寵」によって示された祈りの言葉「カドーシュ カドーシュ カドーシュ ヨッドヘー ヴォッドヘー ツェヴァオット メロー ホル ハアレツ ケヴォドー」はたまたま偶然では片付けられない非常に重要な見えない世界からの「恩寵」

のように思えてならない。

この度のプーチンの戦争によって、人類のいまと未来に人類がおかしてはならない平和のためのありようを覆す根本業の問題が問われている。人類はこの武力戦争という手段を手放さない限り、間違いなく「最後の審判」は下されるであろう。誰に下されるのか。神でも仏でも悪までもない。われわれ自身にであらう。

二十五、結語

不生と潜象と現象のコトワリについて

①ここで問う本不生とは生滅を超えた先験性すなわちブッダ親説阿字本不生に関することである。この「本不生がどのようなして現象界を化現せしめているのか」を問うものである。

そもそも、その問いの大きなきつかけとなったものは前述の、近辺に度々出現する氷像の秘蹟であった。自然現象とはいえ度々出現する氷の三角四面体到人知を超えた不可思議を感じる。

何故であるのか。単なる自然現象に過ぎないのか。それとも見えざるもののわれわれに対する警告であるのか。見えざる意図があるとすればそれは何か。とはいえ、このようなものは専門の科学的知見を得なければ本当のところはわからない。

それにしてもここにおける氷像の秘蹟は自然界の動向と人間のありようとあまりにも密接に絡んでいるように思われ、不思議でならない。

それは、まるで「**如実知自心**」すな

わち「自心があるがままに理解する」「内省」・「内観」・「自己凝視」・「観法」・「観想法」を通じて、「**人類の意識の变革**」をうながしているかのようであった。

では、この氷像がうながす「人類の意識の变革」とは何か。いかにして意識の变革をうながされねばならないのであるか。

その究極の命題が「**本不生と潜象と現象のコトワリ**」に集約されているように思われてならない。ゆえに自分な

りに考察せざるを得ないのである。

② 潜象と現象の関係は未解明であるが前述の物理学上の仮説ダークエネルギーとダークマターと物質界の現象が解明されることによってより明確に把握できるように期待される。

本不生はこれらの仮説でも把握できない「空」にある。潜象における「ダークエネルギーは金剛界大日如来」を指し、いのちの源泉である。この源泉は「先験なる本不生」即ち「空」からもたらされた顕現体であるが故に、

「法身・報身・応身の如来」といわれる。「ダークマターは潜象に生み出された個々の生命である。胎蔵世界であり、現象のもととなり、この胎蔵と現象の互換重合によって宇宙は生々され続けている。」

しかし、潜象と現象はいずれも本不生（先験）から経過し消失し互換重合することによって化現する実相であって、固着される実体ではない。

互換重合とは本不生の源泉より、絶えず、潜象界から現象界へ、現象界か

ら潜象界へ互換重合渉入するプロセスにあり、決して留まるものではない。

現象界も潜象界も「先験より今に経過し消失している」実相であり、実体ではない。

③ブッダが示された〈空〉の真実とは、われわれの知覚の原因になっている潜象・現象としての外界は、経過して《消失しつつある〈今〉の〈変動〉である》から実は常に「捕捉される静止的事物（実体）」がないということである。

認識主体によって把握されたものを実体としてみることは虚妄に陥る。認識主体に感受されたものは虚像に過ぎない。潜象も現象も、「本不生の先験より今に経過し消失し、更新される」実相にある。

このことは唯一神を実体視することや、梵我一如のブラフマンやアートマンを実体視することや、如来蔵として実体視することや、神霊靈魂を実体視することは、認識主体により把握された潜象界・現象界は虚像に過ぎず、こ

れを實在界として実体視するのは認識主体の自己欺瞞に過ぎず虚妄の法であるとして斥けられねばならない。

しかし、これはこの物質界宇宙の顕現も、潜在宇宙の顕現も存在しないということではなく、潜在・現象としての外界は、経過して《消失しつつある〈今〉の〈変動〉である》から、実体常に「捕捉される静止的事物（実体）」がないというだけのことであつて、認識主体による虚妄に執着するなということとはそういうことである。

ここで重要なことは、ブッダは「先験（本不生）より今に経過し、顕現し消失する実相」を否定するものではないということである。

如来蔵といわれるものも、われわれの認識主体の増長ではなく、本不生から顕現している実相にある。したがつて、われわれの認識主体を超えたものに対する執着をも止めねばならない。なぜならわれわれの認識を遙かに超えた潜在なる如来蔵も、本不生の源泉より刻々と生み出され経過して《消失し

つつある〈今〉の〈変動〉である』から、実は、常に「捕捉される静止的事物（実体）」ではないのである。

如来蔵は本不生の源泉より尽きることなく絶えず湧き出る新たないのちの源泉をいう。

世に問われる唯心論や唯物論というものは、その時点で既に概念であるがゆえに、潜象と現象のコトワリの中にある宇宙の実相を把握することは不可能となる。概念上のものはそもそも虚妄であることを承知していなければなら

ない。

而してはじめて、「先験より今に経過し消失している実相」のコトワリは全ての次元に当てはまるものと思われる。顕現（物質）宇宙・ダークマター宇宙・ダークエネルギー宇宙のあらゆる次元は潜象と現象が全体として互換重合し、統合しているという直観がなければ、潜象と現象のコトワリの中にある宇宙の実相を把握することは不可能である。

実相の本質は遍満（実…全）からコ

トワリ（カタ）を通して局所化する化
現（相…個）にある。

カタ（かたち）として局所化されるが、
かたちという実体があるのではない。

先験より今に経過し消失している実相
がカタすなわち現象化しているのであ
ろう。

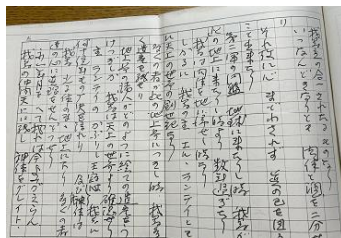
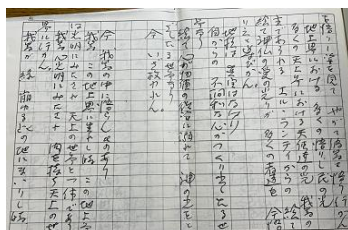
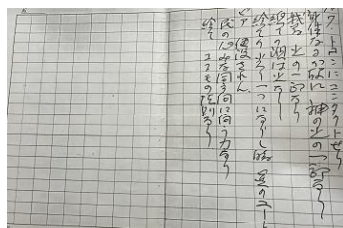
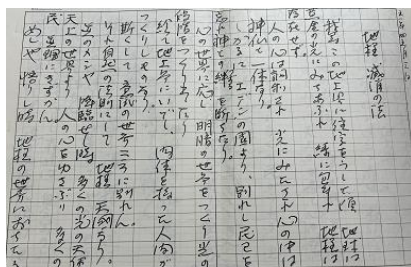
今回のテーマは、『般若理趣經から
導かれた萬歳樂山とボロブドールと五
相成身觀について』である。



昭和五十一年五月三日

恩師 高橋信次 絶筆 原稿

（当時、小職がコピーし、頂戴したものである）



参考文献

『不可知の雲』 作者不詳 奥田平八郎訳 現代思潮社 古典文庫

『不可知の雲』 ウィリアム・ジョンストン校訂 斎田靖子訳 エンデルレ書店

『エノクの鍵』 J.C. ハータック著 紫上はとる、小野満磨訳 ナチュラルスピリット

『トラー祈祷書…ヘブライ語旧約聖書』 シナイ出版

『イザヤ書Ⅰ』 ヘブライ語聖書対訳シリーズ ミルトスヘブライ文化研究所

『聖書ヘブライ語日本語辞典』 古代語研究

会編 谷川正美著

『あなたの中に全世界がある』 J・クリシュ

ナムルティ 中川吉晴訳 PHP 研究所

『評説 インド仏教哲学史』 山口瑞鳳

出版社…岩波書店



令和五年版

朝日山 萬歳楽院 法圓寺
補陀洛山 善明院 歡喜寺

〒96911601

福島県伊達郡桑折町北町字北町十七番地

TEL 024158212959番

編集発行 住職 佐藤 好久

